

事物からではなく世界から思考すること
——E.フィックのカント論に関する一考察——
南 孝典（東海大学非常勤講師）

現象学者の E.フッサールは、彼と晩年に親交のあったユダヤ系アメリカ人哲学者 M.ファーバーに宛てた手紙（1937年6月18日）の中で、弟子のフィックのことを次のように述べている。「親愛なる友よ、フッサールについて語られたすべての文献にお気をつけ下さい。ただフィックの論文だけが例外です。それ以外のものはすべて理解できていないものです」。

本報告で取り上げるオイゲン・フィックは、フッサールのもとで現象学を学び、かつ晩年のフッサールの仕事を助手としてサポートした人物として知られている。フッサールは、上の手紙の一文が示すように、フィックの能力を非常に高く評価し、フランス語版しか発表されていなかった『デカルト的省察』（1929）を拡張してドイツ語版として発表するにあたっては、その主要な部分の執筆をすべてフィックに一任するほどであった。またフィックは、フライブルク大学にフッサールの後任としてやってきた M.ハイデガーの講義も聴講していたが、そのハイデガーも、後年フィックに捧げたある祝辞の中で、フィックが学生時代から特別な存在であったことを明らかにしている。

このように二人の師から認められていたフィックであるが、彼自身の哲学に関しては、彼の名前ほどには認知されておらず、フッサールの現象学とハイデガーの存在論の影に隠れてしまっている。近年になってフィックに関する研究も少しずつ増えてきてはいるが、それでも彼の思想を部分的に論じるものがほとんどで、彼の核となる思想について考察したものはほとんど皆無に近い。しかしフィックは、フッサールとハイデガーの思想を誰よりも高く評価し、かつ誰よりも厳しく二人の思想を批判的に考察する中で、自身の哲学を宇宙論（Kosmologie）という名称のもとに提示することを試みていたのである。

そこで今回の報告では、このフィックの宇宙論の内実について、彼の『世界と有限性』（1990）と『全と無』（1958）という二つのテキストを中心に考察することで明らかにしたい。これらのテキストは、フィックの没後に発表された講義原稿だが、どちらもカント哲学を論じている点で共通している。そしてフィックは、1966/67年に行ったハイデガーとの共同ゼミナールで、自身の宇宙論の構想がカントの理論哲学にその多くを負っていると発言しているのである。

ならばフィックは、カント哲学のどのような点を評価していたのか。また、そのカント哲学との格闘から導かれたフィックの宇宙論とは一体どのような思想なのか。本報告では、これらの問題について考察するだけでなく、フッサール現象学やハイデガーの存在論との影響関係や相違点についても言及することで、フィックの宇宙論の持つ独自性について明らかにしたい。